

関与、嚢胞性線維症責任遺伝子のスプライシング調節多型の疾患関連と機能的意義について示してきた。特に、未知の呼吸器感染症の発生母地として注目されるアジア諸国との国際共同研究は、我が国としても、危惧される新興感染症のアウトブレイクに備える意味で重要と思われる。また、病院部門との共同研究の成果であるヒトの初代気道上皮細胞パネルの集積は、従来のヒト個体の表現型と遺伝子型の関連解析のみならず、ヒト細胞の表現型と遺伝子型の関連を解析することを可能にした。個体のちがいによるヒト細胞の機能的差異を解析することができるため、今後、創薬上も大切なツールとなるものと期待される。

第266回新潟外科集談会

日時 平成20年5月31日(土)
午後1時～4時20分
場所 新潟大学医学部 有壬記念館

I. 一般演題

1 消化器癌終末期医療における輸液経路の検討：皮下輸液の有用性

平野謙一郎・田中 修二・小林 和明
佐藤 洋

県立小出病院外科

消化器癌終末期医療においては消化管閉塞や腹水貯留などにより経口摂取が困難となりほとんどの症例で輸液が必要となる。しかしながら末梢血管の脆弱性や度重なる穿刺により血管確保が困難となる症例も少なくない。今回我々は当科における消化器癌終末期症例の輸液経路の検討および終末期医療における皮下輸液の有用性に

ついて文献的考察を加え報告する。2007年4月以降当科で経験した消化器癌終末期死亡症例26例を対象とした。26例の死亡時の輸液経路は中心静脈カテーテル6例、中心静脈ポート5例、末梢静脈カテーテル4例、皮下輸液9例、点滴なし2例であった。死亡直前の輸液量は平均667ml/日(0-1000ml)であった。死期が迫った末梢血管確保困難症例においては合併症の少ない皮下輸液が有用であると考えられた。

2 内痔核に対する硫酸アルミニウムカリウム・タンニン酸注射液(ALTA注)治療の検討

小林 孝・島山 悟・坂本 武也

新潟臨港病院外科・肛門科

内痔核の治療にALTA注を導入したのでその治療成績を報告する。

【対象】2005年10月～2007年9月までALTA注単独治療を施行した235例。

【結果】術中合併症は23例で26の合併症が、術後合併症は56例で63の合併症が認められた。追加手術施行例は23例。再発は14例で認められた。

【まとめ】ALTA注は有効な治療法だが、施行に際しては十分な量を注入し、外痔核成分が大きな痔核に対しての適応は慎重にした方が良いと考えられた。

3 乳腺matrix producing carcinoma (MPC)の1例

萬羽 尚子・島影 尚弘・関根 和彦
寺島 哲郎・長谷川 潤・岡村 直孝
内田 克之・田島 健三

長岡赤十字病院外科

MPCは癌腫上皮成分と骨軟骨基質からなり、両者の間に紡錘細胞のない乳癌と定義している。

乳癌取扱い規約で浸潤癌の特殊型に位置し、頻度は乳癌全体の0.05～2.0%程度と非常に稀である。

当科で経験したMPCの1例を報告する。